



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
<http://sanchurch.jp/>

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第47号 2013年9月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: 03-3418-4933
発行: 三軒茶屋教会 広報部

「できればキリスト教式で葬儀をしたい」。

教会とは直接関わりのない方から、そのような相談をよく受ける。キリスト教専門の葬儀社にも同様の相談が寄せられていると聞く。

そこには明確な理由がある。葬儀で行うひとつひとつに納得したい。これに尽きるであろう。

今や、風習や習慣にとらわれない葬儀が一般化しつつある。本人や遺族がしたいようにする葬儀が一番ということか。

そもそも葬儀とは何をする時なのだろうか。

「葬」という字は死者の体を草で覆うという業を表している。

その人を見えなくしてしまふのが「葬」の字に込められた思いなのだろう。では、なぜ見えなくするのか。

古来より死は忌むべきケガレとみなされてきた。死者の霊が恐ろしいタタリをもたらさないようにするためにふさわしい慰めをほどこす。それが日本での「葬」の理解であろう。死者の霊が慰めを受けられるためには、日常の所作すべてを非日常化させて、死者の霊に一同の思いを集中させる。いつもと違う服装や食事、語るべき

弔いの言葉で、葬りに集中する。それができて、はじめて慰めが成立すると考える。

この葬儀観は、遺された人たちの安寧が目的となる。それが昨今の納得でき満足できる葬儀を望む思いとして現れているのではないだろうか。

キリスト教の葬儀は、「キリスト教式」あるいは「キリスト教風」という形式で執り行うものではない。来るべきキリストの日に、すべての死者が復活を遂げるという信仰に基づいて行われるものである。

葬りの日のために

牧師 伊藤英志

十字架で死なれた主キリストが葬られた墓から復活した。それが、この人にも、わたしたちにも起こる日が来る。それを互いに確かめ合うのがキリスト教での葬儀となる。

また、故人の生涯がその最初から最後まで神の恵みと共にあったことを確かめ合う時でもある。そして、故人の歩みの中に神の御業が現されていた事実、一同が感謝をささげる時でもある。

キリスト教における葬儀は、ひと言でいえば、「故人との別離を終焉

や絶望の時とはしない」と言える。従って、キリスト教の葬儀は、故人を草で覆い隠すことなどはしない。むしろ故人と共に世を生きたい人々、来るべき自らの死にも誠実に向き合う。同時に、自らの死に対してより誠実に生きようとする姿勢を整える時となる。

教会は、主キリストの十字架での死を思い起こしながら、自らの最期を強く自覚するところである。

最期の備えを教会に任せて、自らに怠らない。それは遺される人々にケガレやタタリを呼び寄せたりはせず、むしろ喜びと感謝をもたらす。



葬儀を経て、もお世を生き続ける人々の「生きる決意」が確固とされていく。悲しみや寂しさを遠ざけていく確かな力をもたらす。それが、正しい葬儀であるはずだ。

満足や納得という皮算用的な基準で葬儀を行うべきではない。葬儀とは、故人となったその人の現実を前にして、自らの死についても真剣に考え抜く時に他ならない。

だれもが迎えるその時に向けて祈りをもって備えていく。その日々は、余計なことにとらわれない、清々しい健やかさに満ちていくのである。